九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近世和漢朗詠集注釈史論考

村上，義明

https://hdl.handle.net/2324/2235994

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式６－２）

氏　　名	村上　義明
論　文　名	近世和漢朗詠集注釈史論考
論文調査委員	主　査　九州大学　准教授　川平　敏文 副　査　九州大学　教授　高山　倫明 副　査　九州大学　教授　辛島　正雄 副　査　九州大学　教授　静永　健

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、平安時代に成立した和歌・漢詩のアンソロジーとしての『和漢朗詠集』が、近世期においてどのように受容（研究）されていたかという問題について、主として注釈書の分析を通じて明らかにしたものである。

序章は、先行研究をまとめるとともに、本論文の問題意識が奈辺にあるかを述べたものである。また第一章は、近世期において刊行された『朗詠集』注釈書十一種について、その形式や内容を分類・整理し、注釈史の流れが学術的な詳注から簡便な略注へと、ゆるやかに移行したことを指摘した。ここまでが、いわば序論である。

第二章は、北村季吟『和漢朗詠集註』論である。本論文は、その注釈内容を客観的かつ詳細に分析することによって、季吟説の独自性を炙り出している。また『集註』の編述・刊行が季吟の古典学者としてのキャリア、および歌学史上に持った意味についても言及しており、文学史的なスケールをそなえた論となっている。

第三章は、岡西惟中『和漢朗詠諺解』論である。本論文は、従来学術的にはあまり高く評価されていなかった『諺解』の所説を詳細に検討することで、先行する『集註』を増補・修正する部分が多々あることを明らかにした。また本書が大阪で刊行されたことについては、出版史的な視座からも考察を加えており、興味深い問題提起をなしている。

第四章は、高井蘭山『和漢朗詠国字抄』論である。まず第一節では、基礎的な問題として、著者である蘭山の家系と著述活動が、百種を超える膨大な著述の調査を元に考察されている。また第二節では、『国字抄』の諸本を悉皆的に調査し、本書が明治期にいたるまで後印を繰り返したロングセラーであった事実を明らかにし、その理由について、本書が学術性と簡便性を兼ね備えた、時代のニーズに合った注釈書であったことを指摘する。第三節は蘭山の著述年表で、いずれも多年にわたる書誌調査を踏まえての堅実な立論であり、労作である。

終章では、本論を総括するとともに、近代以降の『朗詠集』研究が古写本研究に傾斜したこと、またそのために近世の『朗詠集』受容史が軽視されたという見通しを述べる。なお、蘭山と書肆との関係をめぐる付論として、曲亭馬琴の著述を蘭山が書き継いだ『新編水滸画伝』の成立と流布についての論考を添え、第四章の内容を補強している。

以上、本論文は近世期の『朗詠集』注釈史を整理することで、近世学芸史上における『朗詠集』の位置づけを明確にし、またその注釈者の学問姿勢や伝記についても、確実性の高い結論を導き出

している。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つと認めるものである。